

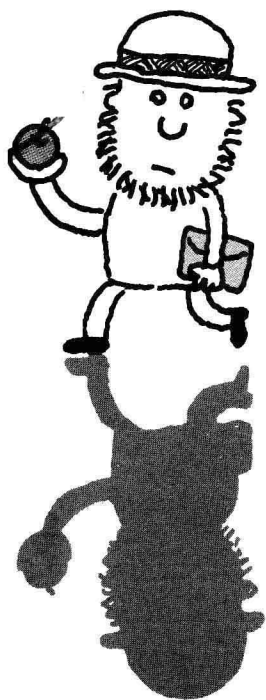
野越えやぶ越え^ワ医車^イの旅^リなだいな

いなだ

E YABUKOE ISHA NO TABI

毎日新聞社

越えやぶ越え『医車』の旅



野越えやぶ越え「医車」の旅

定価 五九〇円

一九七四年十月二十日 印刷

一九七四年十月三十日 発行

著 者 なだ いなだ

編集人 桑原 隆次郎

発行人 朝居 正彦

発行所 毎日新聞社

〒100 東京都千代田区一ツ橋
〒545 大阪市北区堂島上
〒813 北九州市小倉北区紺屋町
〒445 名古屋市中村区堀内町

印刷 東京ベル印刷
製本 佐久間製本

野越えやぶ越え「医車」の旅 目次

「車」に乗れたのは医者だけだった	7
人殺し商売になろうとする	19
人殺しから人すくいへの転向	31
見失われた母校	43
フランス語なかま	54
信じられないけど、純真だった	66
ふらんすへ行きたしと思えども	78
パリでめぐりあった人々	90
自由にめぐりあい、そくばくにめぐりあう	101
電パチ先生となる	113

患者は先生です

124

アカデミック好きのかみなり

135

女ごころオンチ

147

六〇年アンボの頃

160

海辺の病院へ

172

ぼける

183

はじめよければ……

195

首つり、かけおち

207

うれしいよ、さようなら

219

あとがき

232

装幀

オオムラカズヒコ

野越えやぶ越え「医車」の旅

「車」に乗れたのは医者だけだった

将来私が、医者になるだろうと推測したものは、私の子供時代を知る人間の中には、一人もいなかった。私自身さえ、まさか、自分が医者になる日が来ようとは思わなかった。それには理由があった。私は、ひどくおっちょこちよいであったのである。

私は、男ばかり三人兄弟の三人目であった。二人の兄は二つちがいであったが、二番目の兄と私の間には四歳のひらきがあった。母の家は代々医者であった。だが母の父が若死にして、そこで医者が絶えた。そのこともあって、母は三人の息子のうち一人ぐらひは医者になってほしいと、口癖のようにいつていた。ところが上の兄は、早くから、医者がいやだといひだした。そして、次の兄もそれをまねして、いやだといひた。三人のうち二人までも、医者になろうと思っていひないことがわかつた時、母は非常に悲しそうな顔をした。私は、その落胆した母の表情が見ていられなかつたので、なぐさめねばならぬと思つていつた。

—— かあさん、そんなにがつかりするなよ。まだ、このぼくが残つてゐるじゃないか。ぼくが医

者になってやるから安心しなよ。

私が医者になろうなどと思ったのは、その時だけである。ところが、思いがけぬ母の返事に私はとまどった。

——お前の気持はうれしいよ。でもいっておくよ。お前だけは、医者になろうなどと思わない方がいいね。おっちょこちょいのお前が、医者になりたいなんて、考えただけで私は心配で眠れなくなるから。そもそも、私がつかりしているのを見て、すぐ医者になるなんていいだすのが、おっちょこちょいだよ。自分の将来は、そんなにいいかげんにきめていいことじゃないんだよ。

私は、その時、小学二年生くらいであつたらうか。それ以後、私は医者になることなど考えないことにしたし、実際、考えなかつたのである。

私は、小さい時から、ひどく落着かない子供であつた。そもそも、じつとすわっていることが出来なかつた。すわっている時でも、びんぼうゆすりしていた。歩くべきところはかけだした。かけるべきところではころんだ。ごはんを食べる時には、よく、みそ汁をひっくりかえした。そして、あわててぞうきんをとりに行こうとしては、ごはんのおひつにつまずいた。外に出れば水たまりに落ちたし、石ころにはつまずいた。私の体のどこかには、つねに赤チンのしみが一つはあつた。一つでなければ二つか三つあつた。

私はこうして失敗ばかりしていた。そして、失敗するたびに、

——おっちょこちょい。

と、母や兄たちからいわれた。父はいわなかったが、それは父がひどく無口だったからである。

兄たちは、あんまりしばしば「おっちょこちょい」といわねばならぬので、めんどつくさいからと、少しちぢめて、「ちょこちょい」ということにした。そうでなければ、「おっちょこ」というだけで「ちょい」を略した。

私は、学校に行くようになってから、忘れものをよくしたし、ごはんを食べれば舌をかんんだり、ほったのうらがわをかんだ。魚のほねはよくのどにたてた。だが、これは、私ののが他の人のそれとくらべて、ずっとデリケートにできていたためでもある。

ある日のことである。私は、少々かたいごぼうをのどにたてた。

——いてて、また、ほねがのどにささった。

と叫んだが、その日は、食膳に魚はなかった。

——おっちょこちょい。キンピラごぼうに骨があるはずないじゃないの。

と、母がいった。

なるほど、おれはおっちょこちょいだと思ったが、それでものが痛い。たしかに、なにかささっている。ケツケツとやっているうちに、運よくのどからとびだして来たのを見たら、ごぼうのしんであつた。それは私の家での語りぐさになった。だが、おっちょこちょいなのは、私ではなくて、ごぼうの方ではないか、という気がした。

——いくら、かたいごぼうだといって、ごぼうをのどにさしたなんて、これまで聞いたことがな

いよ。お前はほんとにおっちょこちよいだねえ。

母は、感心してためいきをもらした。そして、自分がしんのあるようなごぼうを料理に使ったことを、少しも反省しなかった。

そんなおっちょこちよいの私だったから、誰も医者になればいいなどは考えなかったのである。

私は、同じ理由から、しばしば字を間違えて書いた。そして、兄から叱られてばかりいた。

——こら、おっちょこ。お前はまた日記にウソ字やアテ字を書いてるぞ。

兄は、私の日記をのぞいてはいうのだった。ある時、私は「医者」を「医車」と書いた。

——なるほどなあ。お医者さんは車に乗って、診察に来るもんなあ。

長兄は、その時ばかりは、ひどく感心したようにいった。私は今でも「医者」という字を見るたびに、その時のことを思います。

2

自分が落着かない人間であったせい、私は車という字のつくものが好きであった。汽車、電車、自転車、自動車、乳母車、大八車、戦車、水車に風車、みんな例外ではない。花の名さえ、矢車草やちんぐるま、それに車前草が好きであった。肩車も大好きであった。火の車さえ決して嫌いだはない。

私は小学校を卒業するまで、電車の運転手にあがれていた。電車に乗るといつも運転席のすぐ後ろにたつて、運転ぶりを見つめるのが常であった。昔の電車は、運転席が真鍮しんちゅうの太いパイプで仕切られているだけで、運転手は乗客からよく見えたのである。私が将来、なにになりたいかといわれて答えた最初の職業は、運転手であった。だが、不思議とその時、おっちょこちょいが運転手になつては危険だと、誰もいわなかった。

私が、医者を医車と書いたのは、こうした私のことを考えると、決して無理からぬことといわねばならない。兄が、精神分析医でもあったなら、私の字のあやまりから、たちどころに、私の無意識にあったものを、分析したであろうと思う。

ところで、同じ乗りものであつても飛行機や船は、車という字がつかないので私は好きでない。ことに飛行機は好きでない、というよりは、卒直にいつて嫌いである。仕方なしに乗ることは乗るが、車輪が地から浮いて地に着くまでの間、私は不幸である。飛行場に私を出迎える人たちは、誰も私の顔色を見て心配する。一日たたないと、私の顔色はもとにもどらない。

話が少し横にそれたが、私は、自分ではほとんど病気をしたことがなく、医者にかかったこともあまりなかった。四歳の時にジフテリアになったということだが、私はまったくそのことをおぼえていない。私の兄がまずかかり、それが私にも感染したらしい。血清注射がなかったら、死んでいただであらうということだ。子供をジフテリアにかからせた私の母は、ジフテリアに関しては権威者になった。近所の子供など、正確に診断して医者に送り、おかげで手おくれにしないですんだ、と

喜ばれたことが幾度かあった。近所の内科医あたりが誤診していて、母が偶然に病気を発見した場合もある。

ジフテリア以外、私は病気に縁がなく、小学校の六年間、一日も欠席せず、卒業の時、皆勤賞という賞をもらった。ただ、これには、ちょっとしたインチキもあった。というのは、一日だけ食べ過ぎで腹痛を起し、ひどい下痢をして休みそうになったことがあるからである。母の家伝の薬という「げんのしょうこ」を煎じてのまされ、母の助手の一人におんぶして、ぐったりしながら、それでも学校に行った。六年生の時で、それまで皆勤であったから、この一日の欠席で賞がもらえなくなるのはもったいないという母の命令で、学校に行ったのである。私はそれまで皆勤していたことをうらめしく思った。だが、もっと大変だったのは、六年生の私をおんぶして一キロほどの道を往復した母の助手である。私は、のちのちまでも彼女に、

——あの時のあんたは、重かったわよ。

といわれた。私は私で、皆勤賞の賞の重みを知ったのだった。

そんなふうで、私は現実には医者と縁がなかった。生命を救われたという実感も、痛みをとりさずともらったという実感もなかったから、人をすくう人間というイメージを、医者に対して持つこともなかった。

だから、私の医者イメージは、診察をしたり注射をしたという仕事とは別に作られた。私の

小学校の同級生に医者娘がいた。そして、彼女が私の最初のガールフレンドだったのである。彼女はかわいい顔をしていて、頭もよかった。そればかりではなく、いつも数人の彼女の崇拜者を連れていた。

その頃としては珍しいことであったが、小学校の二年まで男女共学で、彼女と私は同級生であった。その当時、クラス委員は級長、副級長という呼ばれ方をしていたが、私と彼女は、同じクラスの級長と副級長であった。私は、しばしば彼女の家へ遊びに行った。彼女の家は、私の家から一キロばかり離れたところにあった。そして、私の家とはくらべものにならぬほど立派で、二階建ての窓の大きい家にはピアノやオルガンやブランコや、私たちから見れば、目を見はるようなものがそろっていた。だが、それにもまして、私の目を見はらせたのは、彼女の家の自動車である。今から考えると、おそらく、ダットサンのロードスターかなにかではなかったかと思う。濃いブルーか黒かの箱型の車で、私の家の近くにあるただ一台の自動車であったのである。彼女の父親は、その車で往診していた。学校の帰り道など、その車がとまっているのに出会うことがあった。それを見ると、おや、この近所に病人がいるらしいな、と思うのであった。

そのことが、私に医者と自動車を切り離すことができないもののように考えさせた。その自動車は実にのろのろと走ったが、それが自動車のせい、運転手のせいかわからない。私のガールフレンドの父は非常にやさしい、大きな禿頭を持った、そして、チョビひげをはやし、女性的な声でものをいう人であった。彼は、私たちの小学校の校医でもあったので、一年に一度は、私たちの胸に

聴診器をあてた。そして、おなかの皮をつまんで栄養「良」とか「可」とかの評をつけた。私が小学校を卒業するまで、子供時代に見た医者とは彼一人であつたので、私の医者へのイメージは彼の上に作られた。だから、彼とはちがつた風貌を持った医者を見ると、どうも医者らしく思えなかった。そして、なんとなくほんものの医者ではないような感じがした。後年、医者になってからも、どうも自分が医者であると、しっくり感じられなかったのは、私が、そのガールフレンドの父のように頭も禿げておらず、女性的な声でしゃべれなかったからではないかと思う。

こうして医者というものを、むしろ街の中の人間としてしか見ることのなかった私は、いわゆるお医者さんごっこをしたことがない。もし、したとしても、相手を裸にしてさわったりつついたりすることはなく、車の運転をまねするばかりであつた。これでは、お医者さんごっこをしているのやら、タクシートの運転手ごっこをしているのやら、はたのものにはわからなかったであろう。

3

医者へのイメージを、私に変えさせる事件が起きたのは、私が中学二年で、陸軍幼年学校を受験した時である。学科の試験が終つたあと、身体検査があつた。私は、小学校の校医の診察のようなものと、考えていた。どこかの学校の、だだっぴろい雨天体操場が身体検査場で、そこには身長計や体重秤などがならべられており、私たちは手に手に一枚の検査表を持って、順番にそれらの場所をまわるのであつた。パンツ一つだから、けっこう寒かつた。しかし、ふるえをとめようとして、ち